

〈出会い〉と〈手触り〉

——調査研究の規格不能性を考える

根本 雅也 一橋大学大学院社会学研究科 講師

1. 〈出会い〉の衝撃——調査における規格不能性

『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』の執筆を終えた後、32歳という若さで亡くなった保莉実¹⁾は、先住民の歴史を学ぶために訪れた調査地で起きた、忘れられない出会いについて書き残している。グリーンジの長老の一人であるジミー爺さんが保莉に「お前はなぜここにやってきたのか知っているのかね？」と問うたときのことである。

何回か聞かれたんですが〔中略〕僕は「(アボリジニの)歴史と文化を学ぶためです」と答えた。すると彼は「カントリーがお前をここに呼んだんだよ」という。「僕、聞こえなかったけど……カントリーに呼ばれたなんて憶えてないけど……」と言うと、ジミー爺さんは僕の頭を指して「それはお前の記憶、お前の感性が死んでいるからだ。ここでそれらを目覚めさせないといけない。目覚めろ！そのためにここにいるんだ」と言うんです。〔中略〕(スピリチュアリティと)向き合わなければならないことを実感した、強烈な瞬間でした。博士号のためのリサーチだけではなくて、理解し、コミュニケーションするには世界観を変えなければならないのだということを実感しました。あの時のことは何度も思い出します。(保莉 2024: 77)

ジミー爺さんの問いかけ、そして「カントリーがお前を呼んだ」という答えは、保莉にとって自身の考え方を再考するきっかけとなった。アボリジナルの文化とを「理解し、コミュニケーションするには世界観を変えなければならない」ということを、保莉は突きつけられたのである¹⁾。

フィールドにおける〈出会い〉は、必ずしも調査者が抱えていた疑問を解き明かすわけではない。調査研究においては、研究計画書や調査計画を作成する際に、目的や問いを設定する。そして、その目的や問いに相応しい、適切な調査対象を選ぶ。しかし、そのような手続きを踏んだとしても、フィールドではしばしば想定もしていなかった答えが返ってくる。いや、「答え」という表現は適切ではないかもしれない。〈出会い〉は「答え」ではない何かをもたらすこともあるからだ。たとえば、〈出会い〉は新たな謎を生み出したり、そもそもの疑問をひっくり返してしまったりする。さらには、保莉実が自らの「世界観を変えなければならない」と感じたように、〈出会い〉は自らの考え方や立場を問い直す契機にもなる²⁾。

1) 筆者は別稿で保莉実の出会いなどについてまとめている。本稿における引用もその一部である。詳しくはそちら(根本 2025a)を参照してほしい。

2) 調査における〈出会い〉と〈対話〉については、別稿(根本 2025b)を参照のこと。同内容を先端課題研究23「〈面白い研究〉の研究」第2回研究会においても報告している。

調査研究において〈出会い〉は重要なモーメントになりうる。しかし、それは事前に管理・統制できるものでもない。むしろ、調査を企画し実施する過程において、もともとの想定や準備、期待を裏切り、すり抜けたからこそ、その〈出会い〉は忘れ難く、重要な出来事になるのかもしれない。そのように考えるならば、〈出会い〉は調査研究における規格不能性(ノンスケーラビリティ)の一つであると言えるだろう。

いずれの調査研究においても規格不能性の側面はあると思われるものの、ここでは(筆者の専門とする)質的調査を中心にもう少し考えてみたい。

2. 規格化と効率性

質的調査には規格不能な要素が多い。調査を企画して、対象を定めても、その対象と出会うかどうかはわからない。また、実際に話を聞いてみると、そもそもの「対象」の設定の仕方が間違いであったり、自分が抱いていた疑問や仮説が的を射ていなかったりすることが判明し、調査の仕切り直しを求められることもしばしばである。一方、思いもかけないところで偶然に出会った人が調査のキーパーソンになったり、たまたま目にした出来事が理解を促進することもある。こうした偶発的な要素は質的調査に取り組んだことのある者なら共感するところであろう³⁾。

しかし、それにもかかわらず、質的調査は(表面上ではあるが)規格化される傾向にあるように思われる。近年、社会調査士・専門社会調査士という資格制度や大学院の拡充などを背景に、質的調査に関わるテキストが多く編まれている。そうしたマニュアルとも言えるテキストは調査の方法や手順をわかりやすく説明してくれる。それによって、誰もがいつでも調査を実践できるようにするために、である。大学院生などの若い研究者は、限られた時間と資金を使った調査で失敗しないようにするために、それでいて効率的に成果をあげるために、まずこうしたテキストを読むかもしれない。もちろん、質の高い調査を増やすためにも、このようなテキストが編まれ、世に送り出されることは重要であるし、初学者がそれらを読み、学ぶことは必要でもある。しかし、それでもなお、留保すべきことがある。それは、質的調査においては規格化できない(しにくい)余白の部分が多く、それらがしばしば重要な発見につながりうる、ということだ。

調査のマニュアル化や手順の規格化は、「失敗」を回避し、調査を効率的に進めようと思う人びとにとって必要であろう。規格化された方法にもとづいて、想定内の答えを発見し、論文を効率的に執筆する。限られた時間のなかで、最大限の成果(=業績)をあげ、それによりアカデミアで生き残る。そのような効率性が前景化し、目的にすらなってしまうとき、規格の外にある「余白」は〈余計なもの〉となってしまうのではないだろうか。一見、無駄に思える遠回りは非効率的に映る⁴⁾。しかし、それでは、偶然の〈出会い〉は生まれないか、あるいは気づかずに通り過ぎてしまう。急いで近道をしようとした結果、最も大切なものを見過ごしてしまうという、「急がば回れ」の教訓と重なる。

3) こうした調査における偶然は〈たまたま〉であっても〈でたらめ〉であるとは言えない。調査者はその偶然の〈出会い〉に至るまで相応の蓄積をしていると考えられるからである。この点については根本(2025b)でも言及しているが、また別の機会に論じていきたい。

4) 本特集において、鈴木佳苗が「遠回り」の意味について言及している。

3. 〈出会い〉と〈手触り〉——本特集が映し出すもの

本特集は、期せずして、若い世代の研究者たちの〈出会い〉とそこからの思考の展開を生き生きと映し出すものとなった。「期せずして」というのは、もともとそのことをテーマとして特集を企画したわけではないからである。

5) この先端課題研究については代表教員の一人である赤嶺淳(2025)を参照してほしい。

本特集は、一橋大学大学院社会学研究科の先端課題研究23「〈面白い〉研究の研究——規格不能性と向きあう」⁵⁾に参加する大学院生たちの課題レポートがもとになっている。第2回研究会(2025年5月21日開催)では、鈴木直樹、牧田義也、根本雅也が、第3回研究会(2025年6月25日開催)では、太田美幸、佐藤圭一、小泉佑介が「〈面白い〉研究」や「規格不能性(ノンスケーラビリティ)」をキーワードに各自の研究経験について報告した。第3回研究会における受講生への課題は、「①第2回、第3回の報告を聞いて、報告の中で触発されたことや共通点など(自分なりに)簡単にまとめつつ、(可能なら②その中で出てきた著作などを読み)③自分の調査研究に引き付けて議論してください」であった。これをもとに各自が展開した論考が、本特集である。なお、教員による報告については、各回の「報告の概要と批評」(第2回は松浦海翔による「研究の〈面白さ〉はどこにあるか」、第3回は永山理穂による「〈面白い〉研究の『手触り』を求めて」を参照してほしい)でまとめていることから、重複を避けるために割愛している。

上述のように、本特集に寄せられた論考には、それぞれの調査における〈出会い〉とそこからの模索が色鮮やかに描き出されている。「〈フィールド〉から出発し、向き合いつづけること」と題した論考において、松浦海翔は自らの経験をもとにフィールドでの〈出会い〉が調査者の想像力をかき立て、動かす要因となりうることを論じる。小谷英里は「痕跡の不在を歩いて思うこと」において、自身がこれまで調査を実施してきた長崎市ではなく、茨城県日立市でのフィールドワークの経験を記述することから始める。そこでの「痕跡の不在」と「不在の痕跡」との〈出会い〉は小谷を混乱に引き入れるものの、その経験を通じて自らの視点を問い直す様子が描かれる。鈴木佳苗もまた、自らの調査地・フィリピンではなく、東京で開催されたカダヤワン祭りでの〈出会い〉を記述する。そこで鈴木は予期していなかった状況に遭遇し、その意味をまだ十分に咀嚼できてはいないものの、新たな視点を得た感触をつづる。また、鈴木は調査地の「越境」を通じて得た視界の広がりを経験をもとに、学問領域を「越境」することの「面白さ」と重要性に言及する。樋浦ゆりあはアメリカのシャーロットヴィルを訪れ、歩いた経験を詳述する。街の壁に残された文字や撤去された銅像の跡の「声」や「沈黙」との〈出会い〉は、歴史を学ぶ樋浦に歴史学や学問の意味を問いかける。「誰のための研究なのか、誰のための歴史なのか」という副題に掲げられた樋浦の問いは、研究をする／志す者たちにとって考えなくてはならない問いでもあろう。

本特集に寄せられたいずれの論考も、調査地における自身の〈出会い〉を振り返り、そこで育まれた思考のプロセスを記述する。そこで描かれる〈出会い〉の状況や意味は必ずしもきれいに整理されているわけではない。むしろ、ざらざらとして、ゴツゴツとした、まとまりのない記述といえるかもしれない。だ

6) 〈手触り〉は佐藤圭一による報告のなかで用いられた言葉である。しかし、この用語は本研究会のなかでたびたび言及されてきた。本特集においても、永山と鈴木が言及している。

が、そうした記述は、可能性に満ち溢れた原石でもあるようにみえる。このような記述には、調査の〈手触り〉と呼ぶことのできるものが現れているのではないだろうか⁶⁾。〈手触り〉は色々な事柄を含意しうるものの、人の思考と行動——しばしば格闘や苦闘——の形跡の表出／表現という点では共通しているように思われる。この〈手触り〉もまた調査研究における規格不能性と関連する要素であろう。

第2回、第3回の研究会全体を通じて、教員による熱のこもった報告はそれぞれが考える研究の〈面白さ〉とともに、参加者になぜ研究をするのかという根源的な問いを投げかけるものであったように思う。一参加者として、今後の研究会での新たな〈出会い〉とそこで得られる〈手触り〉を大切にしながら、その旅路を楽しんでいきたい。

参考文献

- 赤嶺淳, 2025, 「『マツタケ』のさきへ」『きわ』2(2): 1-5, (2025年9月3日取得, <https://www.kiwa-networking.jp/002-002-001>).
- 保莉実, 2024, 『保莉実著作集 Book 1——生命あふれる大地』図書出版みぎわ.
- 根本雅也, 2025a, 「残された言葉と経験をひらく——保莉実とオーラル・ヒストリー」『日本オーラル・ヒストリー研究』21: 88-99(頁予定).
- 根本雅也, 2025b, 「調査が動き出す」有末賢・小倉康嗣・松尾浩一郎編『社会学的質的調査の挑戦——〈出会い〉と〈対話〉の社会調査論』図書出版みぎわ, 31-57(頁予定).

先端課題研究23「〈面白い〉研究の研究——規格不能性と向きあう」

第2回研究会報告の概要と批評

研究の〈面白さ〉はどこにあるか？

——〈フィールド〉での経験から考える

松浦 海翔 一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程／日本学術振興会 特別研究員 (DC1)

本研究会は、科学研究費挑戦的研究(萌芽)「ノンスケーラビリティ再考——不安定で不確定な現代社会に資する人文社会学の構築」(24K21385)の一環として企画されたものである。

第2回研究会は、2025年5月21日(水)の15時から、マーキュリータワー5階3509教室で開催された。今回の研究会では、はじめに、参加していた出版社の方が紹介され、そのあとで鈴木直樹、牧田義也、根本雅也の3名が研究報告をおこなった。

今回の3名の報告において共通していたのは、研究の〈面白さ〉はどのような点に見出せるのかについて、それぞれがこれまでの研究や実践、あるいは経験にそくして議論していた点である。本稿では、3名の報告と質疑応答の内容について簡潔にまとめたうえで、議論の内容と筆者自身の経験とを引きつつ批評したい。

1. 〈面白い〉研究の研究への第一歩……鈴木直樹

鈴木の研究報告では、歴史研究に興味関心を抱くようになったきっかけや、その後の研究について、また、あたらしい技術を用いた未来の歴史研究の展望と、〈面白い〉研究が生まれる可能性について取り上げられていた。

研究のあゆみと現在

はじめに鈴木は、研究を志す、あるいは歴史に興味をもつきっかけとなった個人的な経験について語っていた。「日本」の「近世村落史・地域史」研究を志した背景には、小学校の図書館で『人物日本の歴史 源頼朝』を読んだことがあるという。その後、戦国大名の研究をしようと思い、大学に進学したが、結果として江戸時代の百姓のライフサイクルを研究する基礎ゼミに入ることになる。そこで近世村落史研究の面白さ——名もなき人びとの生き様が、生々しく残っていること——を知り、そのような研究へと進んでいくことになったと述べていた。

近世村落史・地域史の研究において重要になるのは、古文書の読解を通して村落社会の構造を分析することであるという。具体的には、①村政運営の状況、②村の経済状況、③村落内部の社会関係が分析される。また、古文書の読解が

ら、当時の生活がどのようなものであったかについても迫れるという。

鈴木現在の研究は、おもに南関東を対象としたものである。そのなかで、研究対象時期を3つに区切って、その時期の特色がもっとも現れる事柄に注目して分析しているという。時代区分とそれぞれのテーマとしては、①中世近世移行期・近世前期(16世紀末～17世紀)：北条氏滅亡後、土豪とその子孫がどのように生き残っていったか、②近世中後期(18世紀～19世紀前半)：自然災害と社会との相互関係の検討、③幕末期から明治前期(19世紀)：支配から行政への転換であると説明されていた。

未来の歴史研究——他分野とのコラボレーションにむけて

鈴木これまでの研究内容の説明をふまえて、未来の歴史研究はどのような様相をみせるのか、その展望についても報告された。近年では、たとえばTOPPAN 株式会社(旧：凸版印刷株式会社)が開発した「古文書カメラ」などを使用することにより、AIを活用した古文書の読解が可能になっている。また、GISを活用して、現在の地図と過去の地図を重ねて表示することができるようになったり、データ駆動型人文学とよばれる、所蔵している資料をデータ化し、それを活用した研究をしてもらおうとする動きもあるという。

たしかに、こうした新技術は、あらたな研究を可能にするものかもしれない。しかしながら、資料の読解をとおして単になにかが明らかになったということを書くだけではなく、その歴史的な意義を示す必要があると、鈴木は主張する。そのためにも、他分野とのコラボレーションに可能性を見出せるところがあるというが、それは1歩踏み出すだけではなく、2歩踏み出す勇気が必要なものかもしれないという。ただ、そこにこそ〈面白い〉研究の種が生まれてくるのではないかと述べていた。

2. Nonscalability と歴史実践

——アート・地域・歴史学の交差……牧田義也

牧田の報告では、ノンスケーラビリティと歴史実践としてのアートについて取り上げられた。牧田の研究を大別すると、①ニューヨークの社会史、②赤十字の人道支援に関するグローバルヒストリー、③歴史実践としての芸術実践、の3つがあるという。そのなかでも、研究会のキーワードとなっている「ノンスケーラビリティ」という観点から考えたとき、もっとも近いテーマはアートであると述べる。

ノンスケーラブルなものとしてのアート

牧田は、かれがおこなっているアートに関連したプロジェクトを、歴史実践とする。その背景には、現代アートと歴史学が近年接近している事態があるという。ただし、そこにあるのは、最終的に論文としてまとめるのか、アートとしてまとめるのかという違いのみであり、牧田は近年、論文以外での研究成果

の発信について考えていると述べていた。

現代アートが社会的課題への応答を志向するようになってきていることは「社会的転回」と呼ばれる。それと並行して、アーティストの側では、芸術施設の外で作品を制作しようとする動きがみられるようになってきているようだ。そしてそこでは、地域活性化の側面からアートが見出され、そういった活動は肯定的に捉えられている。しかしながら、地域活性化の手段としてアートが用いられるようになり、そのアートに地域の文化資源(=歴史)が援用されるようになると、地域社会のマジョリティの側に位置づけられるものに反する歴史を扱うことができなくなり、結果として、アーティストが地域社会内で流通する支配的な言説を広めるような存在となることもあると指摘されていた。

大阪の旧造船所とフィリピンでの事例から

つづいて牧田は、ふたつの事例をとりあげ、歴史と芸術作品の接合について報告した。はじめに大阪の旧造船所の事例である。旧造船所の展示において、その空間を単に「美しい」とみなす発言があったという。しかしながら、その場所には、徴用工や連合国軍の捕虜が、強制収用・就労していた過去や歴史があった。地域社会の歴史・過去を知らないまま、キュレーターがその空間をアートの文脈で昇華しようとすることの暴力性を痛感し、地域にアートが出ていくときに、地域社会に内在した歴史に無自覚なままでは問題があるのではないかという認識をもつにいたったという。

フィリピンでの芸術実践の事例もまた、歴史や過去を学んだ成果として出されている。出発点となったのは、1945年マニラ戦の軍事裁判についての文書であるという。その文書からは、日本軍による軍事性暴力について、どこで、なにが起きていたのかわかるといい、いまでも現存する事件発生現場の部屋にて作品の制作がおこなわれた。すなわち、文書の分析(調査)から作品制作をおこなうということである。

こうした歴史実践は、一般的な学術的意味におけるアプローチとは異なるものであるという。すなわちこれは、芸術実践と接続することによって歴史について考え、かつ歴史について考えたことを芸術実践としてアウトプットする、という試みである。牧田によると、こうした実践をスケラブルな歴史研究と比較した際、特徴として挙げられるのは、論文文化しえないような断片(エフェメラ)への注目であるという。要するに、論文というフォーマットをとるときには捨象されてしまうような経験を、芸術実践をとおして考えてきたということである。

そしてそこには、2つのノンスケラブルなものが存在すると、牧田は論じる。すなわち、史料／資料と芸術実践が絡まり合うところでプロジェクトが進んできたということである。ただし、それは慣れ親しんだ学術研究のフォーマットからみればノンスケラブルなものだが、別の基準からすれば測定可能なものになるかもしれないと留保をつけくわえる。そして、自分がもっていない基準にどのように向き合っていくのか、そして向き合ったときに自分の基準

がどのように変容するのか、というような、さまざまな「ものさし」が絡まり合うところで歴史を考えることが、面白い研究の出発点になるのではないかと述べていた。

3. 調査の規格不能性から考える

アカデミアの〈効率性〉と〈面白さ〉……根本雅也

根本の報告では、質的調査がマニュアル化している現状と、実際の調査における〈規格不能性〉の重要性について取り上げられたのち、現在のアカデミアにおいて求められているような効率性と〈面白さ〉を対比するかたちで議論していた。

調査におけるノンスケーラビリティ

はじめに、近年、質的調査に関するテキストが膨大に出ていることが確認され、質的調査がマニュアル化されつつある現状について述べられた。フィールドワークはこれまで、ブラックボックス、あるいは職人芸という側面が強調されていたが、テキストでは「失敗しないためにはどうしたらよいか」というHow to 的な要素があるという。しかしながら、質的調査において、そのような態度はよくないのではないかと根本は指摘する。

こうした流れを受けてか、学生から「どの調査方法が良いのか」や「どの方法が適当か」という質問を受けることがあるという。しかしながら、研究ないし調査がうまくいかないのは、果たして方法の問題なのだろうか、と根本は問う。質的調査がマニュアル化されるなかで、方法論の偏重もみられるようになったが、それによって調査における〈出会い〉や〈対話〉がみえにくくなっているのではないかと述べていた。

そのような偶然性をもった〈出会い〉や〈対話〉について考えるために、根本自身がおこなってきた調査について語られる。2007年から2008年にかけて、広島県広島市を中心におこなった調査において、当初根本がもっていた関心は、自分の被爆体験を他者に語る証言活動にあったという。ただし調査においては、問いを明らかにするような〈出会い〉と〈対話〉がある一方で、予期せぬ解答や態度と出会ったり、〈出会い〉があらたな問いにつながったりすることもあるという。

さらに調査には、問いがわからなくなるような〈出会い〉もあるという。根本は、衝撃をともなう〈出会い〉を通して、どう理解したらいいのか、あるいはどうすれば良いのがわからなくなってしまうことがあるという。実際、そうした経験から、それらをどのように書いたらいいのかわからなくなることもあったそう。

しかしながら、根本が強調していたのは、以下の点である。〈出会い〉と〈対話〉は、問いを解き明かすだけでなく、あらたな問いを生み出すこともあること、また調査者自らを問い直す機会にもなるということ。くわえて、それらは規格

化できない要素であるものの、それにより調査に命を吹き込むものであるということ、である。

アカデミアにおける〈効率性〉と〈面白くなさ〉

つづいて根本は、学生から「質的調査は効率が悪いイメージがある」や「コストが悪い」と言われた経験について語る。そうした質問の背景にあるのは、目的なきコストパフォーマンスや、タイムパフォーマンス志向なのではないかという考えもある一方で、それはアカデミアにも見られる事態かもしれないと指摘する。

近年の研究に関して、ギャップスポッティング型のアプローチが多いと論じるひともある。すなわち、ギャップを見出し、それを埋めようとする研究が増加しているということである。そして、そうした研究は、既存の理論にある前提を再生産しているだけではないか、という指摘がこれまでになされている¹⁾。

根本は、こうした状況について、投稿論文をめぐる主客転倒が起きているのではないかと指摘する。すなわち論文を、研究成果を世に問う手段ではなく、そこに掲載されることを目的として生産している現状があるのではないかと、ということである。その背景には、アカデミアにおける〈効率性〉の檻の存在があると根本は述べ、その状況において、面白さは問われなくなっているという。

では、このような状況のなかで〈面白さ〉はどのように考えられるだろうか。根本は、わたしたちが自明視していたものを否定すること／されることが「面白さ」の重要な要素なのではないかと述べる。そしてその〈面白さ〉をもたらし方法・アプローチのひとつが謎解きの方法論であり、その謎と出会えるのは、文字通りのフィールドだけでなく、歴史文書・統計資料・量的データ・学知をふくむ〈フィールド〉においてではないかと指摘する。そして、上記のような効率性ではなく、こういった面白さに向き合うことが大事なのではないかと、として報告を終えていた。

4. 〈面白さ〉と効率性、あるいはギャップから出発することについて——質疑応答より

質疑応答では、報告者それぞれが考えるアウトプットの方法や実践の意味、あるいは媒体としての本がもつ可能性についてなど、さまざまな質問が出ていた。なかでも、とくに活発に議論されていたのは、〈面白さ〉はどのようなものとして考えられるか、ギャップスポッティングの問題をどう考えるか、また研究という活動につきまとう効率性についてであったように思う。

フロアからは、研究の面白さとは「真偽に介入できる」点にあると考える意見が出ていた。わたしたちが自明視しているものを解体するような試みは、たしかに面白い。しかしながら、院生を指導するなかで、より効率よく入手できるものが正しいとし、効率性と妥当性を混同している状況がみられることもあるという。つまり〈面白さ〉という観点から研究を考えるのであれば、事実や

1) Alvesson, M. & Sandberg, J., 2013, *Constructing research questions: Doing Interesting Research*, SAGE Publications Ltd. (=佐藤郁哉訳、2023、『面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスチョンの作り方と育て方』、白桃書房。

妥当性と効率性がどう関係するのかについても考える必要があるということであった。また、院生がタイムパフォーマンスやコストパフォーマンスについて語るとき、その背景には「失敗できない」という状況もあるのではないかと、という意見も出された。

くわえて、ギャップスポッティングについては、それ自体が問題なのではなく、アイデアの種がある場所でもあるのではないかとという意見も出された。それに対しては、ギャップスポッティングそれ自体が問題なのではなく、失敗してはいけない／できないという状況に囲い込まれている現状のほうに問題があることが確認された。また、ギャップを埋めることと、理論を開発することは分けて考えられるものではないということについても指摘がなされた。

5. 〈面白い〉論文と、業績としての論文

さて、ここで3名の報告を再度簡潔にまとめたい。それぞれの報告において〈面白さ〉をどのような点に見出すことができるかは、つぎのように語られていた。はじめに鈴木は、幼少期の経験について触れたあとで、AIをはじめとする技術の登場や、資料／史料のデータ化がすすむ昨今の状況において、他分野の研究者らとコラボレーションをすることにその可能性を見出していた。つづいて牧田は、歴史実践－芸術実践を事例として、さまざまな「ものさし」が絡まり合う地点が、面白い研究の出発点になるのではないかと述べていた。最後に根本は、わたしたちが自明視していたものを否定すること／されることが面白さの重要な要素なのではないかという、それに出会えるのは広義の〈フィールド〉においてではないかと述べていた。

3名の報告の内容をパッチワーク的に表現するならば、研究の〈面白さ〉とは、さまざまな資料／史料や人、あるいは〈フィールド〉と出会い、対話することをとおして、既存の認識や基準とは異なるものが出てきたときに感覚されるもの、といえるだろう。

こうした研究への向き合い方には、強く共感する。筆者の経験にもとづいて、個人的に考える〈面白さ〉について語ろうとするときにもまた、それは既存の認識枠組みとは異なるものを提示することである、と思う。また、フィールドワークによるさまざまな出会いと対話をつうじて、あたらしい問いが生まれることも身をもって経験している。

だが同時に、質疑応答で議論されていたように、多くの大学院生が「失敗できない」と感覚していることにも共感できるところがある。一大学院生として、〈面白い〉研究をしたいという思いは、もちろん持っている。しかしながら、今後のキャリアを考えるうえで、業績としての論文が必要だと意識していることも、また事実である。

〈面白さ〉を追求することは簡単なことではないし、業績を追い求めるだけでは、スケラブルな枠組みのなかでしか論文を書けないということも承知している。とはいえ、論文を書こうとするとき、その動機の根底にあるのは、やは

り〈面白さ〉なのではないだろうか、これまでの研究会を通じて感じている。振りかえると、わたしが先日執筆した論文においても、最初の出発点は、現代の狩猟者たちが自らを「マタギ」と呼ばないことに、驚きと興味を持ったことにあった。そして、これまでの民俗学的な研究がつくりあげてきた「伝統的なマタギ」という枠組みとは異なる狩猟者像を描き出そうと試みたのである。

研究したことを論文というフォーマットで世に出すとき、それをある程度スケラブルな枠組みのなかでおこなわなくてはいけないことは、わたしひとりの力でどうにかできるものではない。とはいえ、たとえ論文という形式をとっていたとしても、〈フィールド〉で見聞きしたこと、そしてそこに見出した〈面白さ〉を熱量のある「記述」によって表現することは可能なのではないだろうか。

〈面白い〉論文と、業績としての論文の両方が求められるというアンビバレントな状況において、研究とどのように向き合っていくのか。この問いは、研究会を通じてこれからも考えていきたい。

先端課題研究23「〈面白い〉研究の研究——規格不能性と向きあう」
第3回研究会報告の概要と批評

〈面白い〉研究の「手触り」を求めて ——人生に、データに、地図に触れる

永山 理穂 一橋大学大学院 社会学研究科 博士後期課程

一橋大学社会学研究科の先端課題研究23「〈面白い〉研究の研究——規格不能性と向きあう」の第3回目の研究会が開催された。本プロジェクトは、ノンスケラビリティ概念を軸に「〈面白い〉研究とは何か」を多角的に探求することを目的としている。今回の研究会でも、それぞれの専門や方法論を背景にした魅力あふれる報告が行われ、研究の〈面白さ〉をめぐる活発な議論が展開された。

1. 人間形成と社会形成のノンスケラブルな関係……太田美幸

第一報告者の太田美幸は、「人間形成と社会形成のノンスケラブルな関係——教育社会学をはみでる〈教育と社会〉研究」と題して報告を行った。報告は太田が自身の研究テーマに至った個人的な体験談から始まった。高校生のとき、身近な人が交通事故で亡くなったことがきっかけとなり、社会や教育に対して強い不信感や疑問を抱くようになったという。一橋大学社会学部で教育社会学を学んだ後、損害保険会社に4年間勤務し、再び研究の世界に戻った。太田の研究活動は既存の教育社会学という枠に収まらず、多岐にわたるテーマを追求してきた。太田自身は、この「収まらなさ」は、すべて自分の中の問題意識から生まれたものであり、多様なテーマが重なり合うところに自身の研究の核心があると述べる。

太田は、教育は人間をより良い方向へ導くものであるという「目的的规定」を重視する教育学、および教育は既存社会のありようによって条件づけられているという「社会的規定」を重視する教育社会学のいずれも、人間形成の多様で豊かなプロセスを捉えるには十分でないとし、自分自身が注目しているのは、個人が社会からの圧力に抵抗し、自分らしい生き方を模索していく人間形成の営みだと述べた。それゆえに、太田は、学校教育や学力といった数値的評価ばかりに注目しがちな教育研究には面白さを感じないという。特にOECDのPISA調査を例に挙げ、ランキングや点数をもとに教育の成果を測ろうとする教育政策やそれに関する研究のもとで、生きることの複雑さや面白さに目を向けることが軽視されていると指摘した。

太田が目指す「自己形成」研究の〈面白さ〉とは、従来の教育学／教育社会学の枠組みを超え、人間が生涯を通じて社会的環境に働きかけながら、自分に

とって望ましい生活や生き方を主体的に組み立て直していくプロセスを捉えるところにある。すなわち、制度的な枠組みを問い直しながら、社会からの規定に対して個人がどのように抵抗し、新たな生き方を創造していくのかを明らかにすることを通じて、従来の教育学／教育社会学を乗り越える視座を太田は示している。

2. 世界Large-N症候群……佐藤圭一

第二報告者の佐藤圭一は、「世界 Large-N 症候群——『面白い研究』と調査対象の『手触り』』というテーマで報告を行った。佐藤は、自身の専門である量的研究を題材にして、どのような研究が〈面白くない〉と感じられるのかを明らかにし、そこから逆に〈面白い〉研究とは何かを考察した。

佐藤によれば、〈面白さ〉という感覚は個人によって異なるが、〈面白くない〉研究にはある種の共通点が存在するという。それらは、細かな点にこだわりすぎる「ギャップスポッティング」(重箱の隅をつつくような小さな革新)、同じパターンの繰り返し、あるいは研究者自身の熱量の不足によって生まれる単調な解釈などである。このように、〈面白くない〉研究に対して一定の共通認識を持つことが可能であると指摘した。

佐藤はまた、量的研究そのものが本来つまらないわけではないことを強調した。実際に、社会学史においてはデュルケムやジンメルなど、計量的手法・数理的発想を駆使して常識を覆した革新的研究が存在したからである。現在の量的研究が〈面白くない〉とされがちなのは、研究手法や研究者個人の問題というよりも、量的研究を取り巻く「Large-N システム」の構造的な問題に起因しているという。

佐藤の指摘する「Large-N システム」とは、大規模なサンプル(N)を使った研究が主流化し、研究資金が巨大化している状況を指す。特に欧米などでは、大規模な研究資金を得た研究者が調査会社にデータ収集を外注し、自らはマネジメントに専念するスタイルが一般的になっている。結果的に研究者自身がデータ収集に直接関与することが減り、データ生成の過程から遠ざかってしまう。また、論文数や引用数といった量的評価基準が研究成果の評価軸となっているため、大量のデータを扱うことが研究上の優位性を持つようになっている。このような構造的変化が、研究対象との距離を広げ、「手触り」を失わせる要因となっている。

佐藤は、「手触り」の喪失こそが、量的研究から〈面白さ〉やひらめきを奪っていると強調した。実際に自ら調査を行い、データ収集過程に直接関わることでしか得られない洞察や気づきが研究を豊かにすると主張する。自身の経験からも、例えば脱原発運動や気候変動政策に関する研究を通じて、現場を直接知ることに由来するひらめきが重要であると述べた。

最後に佐藤は、Large-N システムへの抵抗策を具体的に提示した。データの一部を自ら収集してみる、典型事例や例外的な事例を深く掘り下げる、ケース

を単に変数として扱うのではなく、そのケースごとのストーリーを丁寧に見る、さらには社会運動や関連する現場のイベントを訪れるなどの方法で、量的研究においても対象への「手触り」を取り戻すことが可能であると指摘した。佐藤は、量的研究に本来伴う曖昧さや「怪しさ」をむしろ積極的に引き受けることで、量的研究が社会の常識を問い直すような〈面白さ〉を再び得られると結論づけた。

3. 地図の〈面白さ〉……小泉佑介

第三報告者の小泉佑介は、「地図の〈面白さ〉——地図をよむ、地図を描く、地図とともに歩く」と題し、自らの経験を交えながら、地理学の〈面白さ〉を語った。小泉はまず、自身のキャリアを振り返った。大学時代に東南アジア、とりわけインドネシアに魅せられ、当初は研究者になるつもりはなかったものの、次第に地理学の視点に惹かれ、現在の専門分野に至ったという。

報告の中心は、地図という媒体が持つ〈面白さ〉についてであった。地図は一見シンプルに見えるが、その作成には膨大で緻密な作業が必要である。小泉は具体的な事例として、関東大震災後の東京の人口移動を描いた地図を紹介した。統計データをデジタル化し、古地図に一つ一つ落とし込む作業は途方もなく地道であるが、だからこそそこから新たな社会的現象が鮮明に浮かび上がる。このプロセスこそが、地図を作る最大の醍醐味であると述べた。また、小泉は、地図が持つ視覚効果とその危険性についても言及した。大阪都構想の投票結果を地図化した例を示し、地図の色の使い方や区分方法一つで現象が実際以上に誇張されてしまう可能性があるとは指摘した。このように地図は常に批判的に読み解く必要があり、その作成にも繊細な判断とリテラシーが求められると強調した。

報告の後半では、小泉が最近取り組んだ研究として、ジャカルタ周辺の都市化プロセスを示したアトラスを紹介した。インドネシアの基礎自治体レベルで、街灯の整備状況や燃料利用状況、村長の学歴の変化など、多様な社会経済データを地図化したものである。この作業を通じてフィールド調査だけでは決して見えない特異な現象や地域性が浮かび上がり、例えば、特定の村に靴職人が集中するなどの興味深い発見につながった。さらにこのアトラス制作では、地図を専門としない人類学者や社会学者、デザイナーなど他分野の研究者と協力したことで、より〈面白い〉発想が生まれたことを報告した。特にデザイナーが提案した「色に意味を持たせない配色」という発想は、地図作成の常識を覆す新鮮な試みであり、こうした異分野の視点を取り入れることが、地図の〈面白さ〉をさらに深めたと述べた。

最後に小泉は、地図の本質的な〈面白さ〉は、深夜まで延々と地図を作り続けることに熱中するような、他者にはなかなか共有しにくい個人的な楽しさにもあると語った。スケラブルとノンスケラブルの両面を含んだ地図そのものの、地理学の真の魅力があると締めくくった。

4. それぞれの〈問い〉とどう向き合うか——質疑応答を通して

報告後には活発な質疑応答が行われた。太田には、「教育の社会的規定と個人の自己形成の関係性をどのように整理しているのか？」という質問があった。太田は、人は教育や社会化を通じて社会的に望ましいとされる価値観を内面化するが、それに対して抵抗し、自分自身にとって望ましいあり方を再構築することが可能だと回答した。特に太田は、成人以降も継続的に行われる自己形成に注目しており、個人が主体的に社会環境との関係を組み替えていくことが重要だと述べた。

佐藤には、「量的研究において、数字の分析と現場の感覚的な『手触り』を両立させることは可能なのか？」という質問がなされた。佐藤はこれに対し、完全な両立は難しいとしつつも、現場を熟知した研究者が量的データを扱うことで、単に数値を操作するだけでは得られない解釈や気づきが得られると答えた。つまり、データの背後にある文脈を理解することで、量的研究はより深い意義を持ちうると指摘した。

最後に小泉には、「ジャカルタに関する地図をみんなで作成し並べるワークショップを行った際、何に〈面白い〉と感じたのか？」という質問が寄せられた。小泉は、多様な分野の研究者がジャカルタのデータを地図に落とし込む試みを行う中で、予期しないパターンや発見が現れたことが面白かったと回答した。さらに、「なぜ地理学者は必ず現場調査に行くことを重視するのか？」という問いには、地理学者にとって現場調査は単なるデータ収集を超え、そこでしか得られない「手触り」や感覚が重要であり、それらが研究の核心にあると述べた。

5. 人生、データ、地図の「手触り」から浮かび上がる

〈面白い〉研究の輪郭

以下、執筆者の感想を示す。太田の報告からは、既存の体制への抵抗の可能性に真正面から取り組む熱意が強く感じられ、大変感銘を受けた。特に印象的だったのは、イリイチの『脱学校の社会』の一節「われわれが知っていることの大部分は、われわれが学校の外で学習したものである」を引用し、制度化された教育学／教育社会学の限界とインフォーマルな学びへの着目の重要性を示されたことである。太田は「人間の能力は本来規格化されるものではない」と指摘したが、この言葉通り、一人ひとりの可能性や才能は画一的な基準には収まりきらないノンスケーラブルなものである。こうした視点を踏まえ、既成の枠組みに違和感を覚えたら徹底的に向き合うべきだという太田のスタンスには非常に共感した。「やりたいことやなりた職業が多すぎる」と生き生きと語る太田からは、研究や人生に対するポジティブな姿勢が感じられ、聞いていて勇気をもらえるような報告であった。

佐藤の報告は、興味深い論点が多く提起され、大変刺激的であった。特に「Large-N システムにどう抵抗するか」という問いを掲げ、その解決策を模索している姿勢に感銘を受けた。佐藤が提起した解決策はいずれも、大量のデータ

に埋もれて見失われがちな対象の「手触り」を取り戻すための取り組みである。このようなアプローチは、ミルズによる「抽象化された経験主義」への批判とも響き合うように思われる。ミルズは、大規模な統計調査に没頭しすぎると分析自体が形式的で中身のない巧妙さ——いわば概念へのフェティシズムに陥り、社会や人間について大して学べなくなってしまうと指摘している。佐藤の提起するアプローチはまさにこのような弊害への処方箋と言える。データの背後にある物語や文脈に目を配ることで、数値分析に理論的・歴史的な意味づけを取り戻し、分析結果に厚みと〈面白さ〉が加わるだろう。量的手法と質的洞察の架橋とも言える佐藤の提起は、社会調査のあり方を再考する上で非常に示唆に富んでおり、私自身大いに刺激を受けた。

小泉の報告もまた、研究会のテーマと響き合う刺激的な論点が多く示され、地図の魅力が存分に伝わってきた。とりわけ印象に残ったのは、「新しいテクノロジーが登場したからといって、それがすぐさま社会科学の〈面白い〉研究に直結するわけではない」という指摘である。社会科学の領域では近年、ビッグデータ分析など最新技術を導入する研究が盛んであるが、その導入自体が研究の質や面白さを保証するわけではない。小泉の主張は、最新技術を無批判に採用する傾向に対する警鐘であり、私自身も強く共感を覚えた。今日、デジタル技術を用いれば誰でも容易に美しい地図を作成できるが、小泉はむしろ地図作成のプロセスに伴う複雑さや困難な作業こそが重要であり、そこから研究上の新たな洞察や発見が生まれると主張した。「地図の魅力は腱鞘炎になって初めて分かる」というフレーズが特に心に残っている。報告全体を通して地理学や地図への熱量がひしひしと感じられ、「私も地図を作りたい!」と思わせるような報告であった。

総括すると、太田・佐藤・小泉それぞれの報告を通じて、〈面白い〉研究とは、研究対象との「手触り」を大切にしながら、既存の常識やシステムを批判的に問い直すことから生まれるのだということを実感した。太田のように違和感や困難に正面から向き合い、教育そのものや教育学の枠組みに挑戦する姿勢、佐藤の提起するデータの背後にある埋もれた物語を丁寧に掬い上げる工夫、そして小泉のように地図作成のプロセスそのものに身体的に関わること——これらはいずれも、社会科学の研究に「手触り」を取り戻し、研究をより〈面白い〉ものにするための重要な指針となるだろう。研究対象に直接触れ、その質感を感じ取ることで初めて見えてくる世界があり、それこそが規格化に抵抗しながら、社会科学を豊かにしていくのだと強く感じた。

6. 「手触り」から社会科学の〈面白さ〉を捉えなおす

最後に、私自身の研究に引き付けて考えたことを記したい。私にとって研究における「手触り」とは、フィールドで経験ないし空間を共有しなければ気づけなかった違和感、あるいは語られた言葉の奥に沈む感情のざらつきに、文字通り触れるような経験である。私は約3年間、化粧品メーカーで美容部員アル

バイトとして働きながら、店舗での接客・朝礼・休憩中の雑談・研修・異動の場面などを観察し続け、同時にインタビュー調査も重ねてきた。

インタビューでは、「お客様に信頼されるには、清潔感と華やかさが必要」「どんな日でも笑顔を崩せない」といった語りが繰り返し語られる。こうした言葉は、美容部員という職業において求められるふるまいや意識を端的に表しているように見える。だが、実際に売場に立ち、日々の業務をともにするなかで、こうした語りが常に自信や納得を伴って発されているわけではないことに気づかされる。たとえばある日、月末の売上に追われるなか、同僚がバックヤードでファンデーションを塗り直しながら「今日は顔色が悪くて、お客様の前に出るのがちょっとつらい」と呟いた。その後、彼女は鏡に向かって小さく深呼吸し、いつも通りの表情を作って売場に戻っていった。その姿には、決められたルールに従っているというより、自分をなんとか整えて接客に立つための、日々の微細な調整と気持ちの切り替えがにじんでいた。

このような場面に立ち会うことで、インタビューで語られた言葉が、あらかじめ意味の定まった正解としてではなく、その都度、自分の状態と向き合いながら紡ぎ出された言葉として聞こえてくるようになる。そこには、美の規範にただ従っているのでも、抗っているのでもない、評価に晒される現場で自分の居場所を確保しながら働き続けるための継続的な試行錯誤があった。「手触り」とは、まさにこのような語りと行動のあいだにあるずれや、その背後にある逡巡や感情に調査者自身が巻き込まれながら応答していく過程で得られるものであると思う。現場で生じる違和感に立ち止まりながら、その都度、問いを立て直すことを試みること——それこそが、私にとって社会調査の醍醐味であり、社会学の〈面白さ〉が立ち上がる場所である。

〈フィールド〉から出発し、 向き合いつづけること

松浦 海翔 一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程／日本学術振興会 特別研究員(DC 1)

1. 〈面白さ〉の源泉としての〈フィールド〉

先端課題研究23「〈面白い〉研究の研究——規格不能性と向きあう」のこれまでの報告において共通していたことは、〈フィールド〉から問いを出発させること、そして〈フィールド〉と向き合いつづけることの重要性であったように思う。

第2回(鈴木報告・牧田報告・根本報告)、第3回(太田報告・佐藤報告・小泉報告)の研究會から得られた示唆をやや強引にまとめるのであれば、そこに通底していたのは〈フィールド〉での／との対話が重要視されている、ということであったといえるだろう。あるいは、第1回の赤嶺報告でもまた、日本だけでなく世界各地を歩き、実際に「現場」をみることに、そして史資料を横断することによって〈気迫〉のこもった研究ができると強調されていた。

ここでの〈フィールド〉は、文字通り調査地という意味でのフィールドだけではなく、歴史文書・統計資料・量的データ・学知などもふくむものとして想定されている。この〈フィールド〉へのこだわりは、問いの出発点としてだけでなく、研究をすすめるうえでのアイデアや想像力、あるいは〈面白さ〉を見出さうものであるように感じられた。

では、〈フィールド〉と向き合いつづけることには、どのような意義があるといえるだろうか。〈フィールド〉と向き合うことを通して、研究はどのように変化していくのだろうか。本稿では、筆者自身のこれまでの研究活動を振り返りながら、その重要性や研究の軌跡を「想像力」や「暮らし」をキーワードとして記述してみたい。

2. 想像力を駆動するために

まだ記憶にあたらしいかもしれないが、2023年、秋田県はツキノワグマ(以下、クマと表記)による甚大な被害に見舞われた。当時、県内では2,334頭のクマが捕殺されただけでなく、人身被害を受けた人の数は70名にまで達し、捕獲頭数・人身被害の数ともに全国最多、かつ過去最多となった。

その渦中に、阿仁マタギとよばれる狩猟者たちについての調査を実施していた筆者も、これまでに経験したことのないクマと人間の距離感に、日々驚かされていた。買い物のために車を走らせていると、(普段であれば絶対にいるはずのな

い) 田んぼにクマの親子がいるのを見かけたこともあったし、集落のはずれに位置する神社の写真を撮りに歩いているときに、ソバ畑の傍にクマのフンが落ちていたのを見つけ、恐怖のあまり写真を撮らずに急いで家路についたこともあった。

こうした事態は、連日テレビのニュースや新聞などで報道され、世間の注目を集めていった。一方では、クマの駆除への批判とクマの保護の重要性が叫ばれ、他方ではその批判に対する批判——たとえば「だったらあなたが秋田に住めばいいじゃないか」——がSNSを中心に散見されるようになった。狩猟者たちは、このような分断のなかで、行政からの指示のもとクマの駆除活動に従事していたのである。

しかしながら、少なくとも筆者の調査地の狩猟者たちは、「気楽」に駆除をおこなっていたわけではなかった。かれらは出勤前や退勤後に時間がつくれるよう調整したり、人手を集めたりしながら、箱罠の設置や駆除、そしてその後の解体などといった一連の作業をおこなっていた。また、ほとんどの狩猟者が口を揃えているのは、狩猟でクマをとるのが自然であって、本当は駆除をやりたくないということであった。ただし、実際に人身被害が発生したり、近隣の果樹園で食害に見舞われたりするようなことがあれば、その原因たるクマを駆除せざるを得ない。狩猟者たちは、こうしたジレンマを抱えながら駆除に従事していたのである。

これは、さまざまな報道と世論だけでは想像できなかったであろうことである。政府や地方自治体が公表している統計データを参照すれば、何頭のクマがどこに出没し、どこで駆除され、何人の方々が被害を受けたのか、容易に知ることができる。また、クマの保護を主張する側と、クマの駆除の推進を主張する側の意見の相違について知ることができる。しかしながら、当時クマと人間がどのような距離感で生活していたのか、駆除がいかに生活のなかに組み込まれていたのか、どのような気持ちで駆除をおこなっていたのかということを知るには、〈フィールド〉より出発するほかない。保護／駆除という陳腐な二項対立ではないかたちで現実を描くためには、〈フィールド〉での経験をもって想像力を駆動させる必要があると実感している。

大規模な「被害」に見舞われた2023年から1年後、筆者はある狩猟者とともに、キノコ採取のために山へと向かっていた。かれが運転する軽トラックの車内で、かれは当時を回顧しながら「なんも悪いことしてないのにね」と言った。いまでは、この言葉の背景が多少なりとも理解できるようになった。それは、〈フィールド〉と向き合い続けてきたことによるものだろう。

あるいは、別の方向を向いた想像力も存在する。筆者のもっている想像力が、いかに一方向的であったかを痛感させられる経験があった。2025年6月に参加した狩猟者が集まる場において、とあるクマの保護団体の会員が発言した。専門家や有識者のプレゼンテーションがおわり、質疑応答にうつったときであった。かれは挙手をし、司会者がかれを指したあとで立ち上がり、名前と所属を名乗った。わたしは、フィールドノートに文字を書いていた手を止め、

バツとかれのほうに振り向いた。かれの放った言葉が、熊谷達也『相克の森』(集英社文庫、2006年)の冒頭を思い起こさせる緊張感を生じさせていたことを、いまでも鮮明に憶えている——「肌でわかるほどに会場の空気が変わった。ひとりの若い女の発言が原因だった。マイクを通した女の声が、軽いハウリングを伴って響いた。『今の時代、どうしてクマを食べる必要性があるのでしょうか』」。

この会員が質問したことは、クマを狩猟、ないし駆除することを批判する目的のものではなかった。だが、かれが自身の所属を明かしたときに感じたあの緊張感と、一瞬で振り返るという行動をわたしがとったことは事実であり、そのときのことが頭から離れなかった。このことは、狩猟者に対する想像力は持ち合わせていても、保護を主張する人たちに対するそれは持ち合わせていなかったことを露見させたように思える。当然といえば当然なのだが、狩猟者たちと生活を共にした時間を重ねるたびに、わたしは自身と狩猟者を重ね合わせて物事を考えるようになっていったのかもしれない。

物事を多面的に捉えるための「想像力」を駆動させるためには、文字通り調査地としての、あるいはさまざまな文献資料などを含む〈フィールド〉と向き合いつづけ、そこで出会うことができる「声」に耳を傾けつづけることが必要だろう。

3. 日々の生活、あるいは「暮らし」を知ること

これまで述べてきた「想像力」を駆動させることのほかに、〈フィールド〉と向き合いつづけることの意義は、(一部重なるところもあるのだが)「暮らし」を知ることにあると考えている。

先に述べたとおり、筆者は阿仁マタギについての調査研究をおこなっている。阿仁マタギをはじめ、「マタギ」と呼ばれる狩猟者たちについては、これまで多くの民俗学者が研究してきた。そのなかでも、とりわけ初期に位置付けられる一連の研究において、「マタギ」はある種の特異な存在として記述され、それらの研究によって「伝統的」や「クマ狩り(狩猟)」などというマタギのイメージが構築されてきた。そして、そうしたイメージは今日一般に用いられている「マタギ」という語の意味の中核をなすものでもある。しかしながら、表象されるイメージとかれらの自己イメージのあいだには齟齬がみられる(松浦 2025)。

その一因としては、かれらの生活は狩猟だけで成り立っているわけではないということが挙げられるだろう。かれらは一年を通して会社員として働きながら、季節に応じて山菜やキノコをとったり、クマやカモを狩猟したり、あるいは先に述べたような駆除に従事したりする。また、山菜やキノコを塩蔵し1年にわたって山の恵みを食べられるように備えたり、冬場を乗り切るために長い時間をかけて薪を割ったりもする。夏には草刈りを、冬には雪下ろしを、早朝からおこなっていることもある。要するに、1年というサイクルが強く知覚されているのである。

このことは、マタギを「伝統的」とあるとか、「クマ狩り」に従事する人びと

といった視点とは異なる見方——生活——を浮かび上がらせる。ある狩猟者は、このことについて「マタギは「暮らし」の一部である」と語っていた。先述した有害駆除もまた、狩猟や山菜・キノコの採取、あるいは生活をつづけるための活動と同様に、「暮らし」に組み込まれたものとして捉えなければ、見落としてしまうものがある。目につきやすく、注目を集めやすい事柄だけを取り上げるのではなく、かれらの「暮らし」に目を向け、リアリティをもったかたちで生活を描くことが重要である。そしてそれは〈フィールド〉と向き合いつづけることによって初めて可能になるものだろう。

4. 〈フィールド〉と向き合いつづけること

わたしがはじめて調査地の集落を訪れたのは、2021年の3月、学部4回生になる直前であった。全長500メートルほどの長く薄暗いトンネルを抜けると、視界が一気に広がり、まだ雪が残る集落があらわれたときのことを、いまでもはっきりと覚えている。

調査を開始するにあたって、わたしは自分自身の人生に深く関わるような問題意識をもっていたわけではなく、ほとんど学術的な興味関心だけで研究をはじめた。当初の問題関心は「マタギ勘定」と呼ばれるクマ肉の分配方法を調査研究することにあつた。もちろん、さまざまなことをフィールドノートに書き込んでいたが、基本的には「マタギ勘定」についての話を聞き、データを収集することに注力していた。しかしながら、大学院進学後からはフィールドで得られたデータをきちんと記述すること、そしてそこから問題を立ち上げることを学んだことによって、問題関心は多岐にわたるようになった。ここではキーワードを列挙するにとどめるが、いまでは、たとえばクマ猟、有害駆除、食物分配、山菜・キノコの採取とその利用、カモ猟、移住者などに関心を抱いている。

こうした多種多様な関心は、〈フィールド〉での／との対話を通じて生み出されたものである。調査地の集落に何度も足を運び、かれらと生活を共にし、どのような「暮らし」が営まれているのかを学んだことで、「マタギ勘定」の研究だけをしていても、かれらの生には迫れないとを感じるようになったのである。

また、調査地でフィールドワークを実施するだけでなく、先行研究や行政文書などといった文献とのあいだを行き来することによって、そのあいだの齟齬に気づくこともあった。たとえば、先に述べたような有害駆除の事例がある。参与観察によって明らかになった有害駆除のありようをふまえ、県をはじめとする行政による政策をみると、そこには乖離があることが明らかになる。こうしたプロセスを経て、再度自分の〈フィールド〉に立ち返ってみる。すなわち、政策について知ったうえで参与観察をおこなったり話を聞いたりすると、最初の印象とは異なる側面に気づくことができるということを経験してきた。

〈フィールド〉で得られる経験は、文献を読む際の想像力を駆動することもある。狩猟を終えてから30キログラムほどの肉塊を背負って山を2～3時間にわたって歩き続けることのつらさ、解体に参与することでわかる死んで間も

ないクマの肉のあたたかさ、手についた脂と血の感触などといった経験をもって、かつて書かれた調査記録などを読むと、そこにより一層のリアリティを見出すことができるようになった。

最近、調査地である秋田県だけではなく、長野県、新潟県、福島県、山形県など、かつて阿仁マタギが出稼ぎ猟をしていたとされる場所にも足を運んでみている。それぞれの地域の資料館でみたり読んだりしたこと、その土地の人に聞いた話、文献で読んだことなどが、ぐるぐると巡りめぐって自分の研究に返ってくる瞬間が、いつかこの先訪れるだろう。各地の人びとの「暮らし」を知り、いくつもの想像力を持ち合わせておくことで、あらたな研究のアイデアや〈面白さ〉が生まれる瞬間があるかもしれない。そのときを楽しみに、いまはいろいろなものに触れてみたいと思っている。

参考文献

熊谷達也, 2006, 『相克の森』集英社.

松浦海翔, 2025, 「〈あわい〉の狩猟者——「伝統的なマタギ」からの解放と、現代における自己イメージ」『現代民俗学研究』17: 1-16.

痕跡の不在を歩いて思うこと

——茨城県日立市でのフィールドワーク経験をもとに

小谷 英里 一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程／日本学術振興会 特別研究員(DC2)

1. これまでの研究会の振り返り

——研究の〈面白さ〉を形づくる〈気迫〉

第一回目の赤嶺報告から得た示唆のひとつは、〈面白い〉研究からは〈気迫〉がにじみ出ることであった。では、〈面白さ〉を形づくる〈気迫〉は、研究者のどのような行為に基づいて生じているのだろうか。以下は、第二回目の鈴木報告、牧田報告、根本報告、第三回目の太田報告、佐藤報告、小泉報告において、それぞれからにじみ出ている(と私が感じた)独特の〈気迫〉の共通点を探り、それが何なのかを考察する試みである。

6名に共通していたのは、目的を遂行するために、なぜ、どのような〈手段〉を採用しているのかについて自覚的であったことである。ここでいう〈手段〉とは、たとえば、学問することそれ自体、依拠する学問分野、研究対象、調査方法、調査において大事にしていることなどが含まれる。〈手段〉にこだわることは必然的に、研究を通じて何を成し遂げようとしているのかという根本的な問いを喚起し、それに対する応答を要請するだろう。だからこそ、6名から切実な問題意識がうかがえたのであり、私はそこに〈気迫〉を感じたのである。

気づけば研究する日々が自明なものになってゆくなかで、一体何のために研究しているのか、なぜ他でもないこの〈手段〉なのかという根本的な問いを忘れかける瞬間が私にはあった。もしこうした問いを根底に据えつつ研究活動を進めることが〈面白さ〉を形づくる〈気迫〉を支えるのだとすれば、何度でもここに立ち返ることが重要なのではないだろうか。

〈手段〉へのこだわりを支える問題意識は、一人ひとりの経験の積み重ねのなかで醸成されていくのだろう。次節以降では、その中間報告として、私の経験に即した研究ノートを書きたい。

2. 痕跡の不在への着目

フィールドワークをおこなうとき、私たちは出来事を物語る痕跡に目を向けがちである。他方で、歴史学者の牧田義也は、「歴史・記録・記憶——歴史実践と路上のアクチュアリティ」(2019)において、物理的には消失してしまった過去の痕跡が、記録史料を通じて現在の知覚に介入する現象に着目している。

痕跡の不在において、牧田は記録史料を知覚の枠外から差し込まれる「不在

の痕跡」として位置づけ、それらがどのような意味や機能をもつのかを考察した。より具体的には、フィールドワークの参加者らが、記録史料を手にしながら大阪港湾地域を歩くことをどのように経験したのかを論じている。特筆すべきは、従来の記憶論・歴史認識論の多くが記念碑や遺構、展示施設などの知覚可能な過去の痕跡に注目した一方で、牧田は痕跡の不在に焦点を当てている点である。

牧田によれば、フィールドワークの参加者らは、現在の風景から「過去の痕跡」を探すという課題に取り組んだ。そして、参加者らは、現在の知覚における痕跡の不在に直面していく。1910年代以降に大阪市への沖縄出身者の流入が続いたことによって形成され、「沖縄スラム」と呼ばれた一角の痕跡は、1970年代以降の進行した「開発」事業によって、外形上残されていない。こうした痕跡の不在を確認した参加者らは、記録史料を通じて「沖縄」や「朝鮮」といった記号を挿入されることによって「攪乱され、やがて多元的な解釈の複合によって新たな現実認識へと更新・再編されていく」(牧田 2019: 155)。

大阪港湾地域で痕跡の不在を歩く人びとをめぐる記述は、私が茨城県日立市におけるフィールドワークで経験したことを思い起こさせる。本稿の目的は、日立市での出来事を回想しながら、私が痕跡の不在を歩くこと、すなわち現場で生じる「攪乱」とそれとともなう現実認識の「更新」・「再編」をどのように経験したのか、その経験が私にどのような影響を及ぼしたのかを考察することである。この作業を通じて、これまでの研究の歩みを振り返り、今後の方向性について述べたい。

3. 痕跡の不在と「不在の痕跡」との往還

2024年5月、私ははじめて茨城県日立市に赴いた。市民運動団体が実施したフィールドワーク企画に参加したのである。その市民運動団体は、韓国で組織化された「朝鮮学校を応援するとともに、韓国社会へ朝鮮学校の存在を知らせていく活動」¹⁾を軸とする市民運動団体「モンダンヨンピル」の日本支部「一般社団法人モンダンヨンピル」の青年支部「モア」であり、「日本に住んでいる韓国・日本・在日同胞青年たち」²⁾によって構成されている。私は、別の市民運動団体で出会った在日朝鮮人の友人の呼びかけを受けて、1泊2日のフィールドワークに参加することになったのである。

茨城県では、日立鉱山をはじめ常磐鉱山、竜ヶ崎の羽田精機工場、七会村の鷹峯マンガン鉱山などに朝鮮人の強制連行・強制労働の記録をみることができる(歴史変遷委員会 2023: 8)。私たちがフィールドワークをおこなったのは、日立鉱山に関わるエリアであった。茨城県内に居住している在日朝鮮人の2名の案内を聞きながら、参加者11名が地域を歩いた。

参加者らが連れられたのは、一本杉が印象的な坂道であった。それはなんの変哲もない車道であり、近くには建物はなく、山に囲まれている。その坂道で参加者は、1974年に作成された「茨城日立鉱山朝鮮人強制連行真相調査事業

1) モンダンヨンピル, 2025, モンダンヨンピルホームページ (2025年7月20日取得, http://www.mongdang.org/jp/bbs/content.php?co_id=page01)

2) 2024年5月18日フィールドノートより。

報告者」に載る証言を読んだ。当時の茨城朝鮮学校の生徒が現地を訪れて、「一世同胞達」が「悲惨な事実を涙ながらに語っ」た証言を編んだものである（歴史変遷委員会 2023: 10）。茨城県内における朝鮮人の強制連行・強制労働をめぐる記録は多くは残されておらず、それは貴重な資料の一部であった（歴史変遷委員会 2023: 10）。証言では、私のすぐ横にそびえ立つ一本杉の下で起きた暴力のありようが語られていた。

私は証言を読み終わり、顔を上げ、その一本杉に目を戻した瞬間の、あの言葉にできない息がつまるような感覚を忘れることができない。収容所のような部屋に詰め込まれ、一帯には鉄条網が張り巡らされ、24時間監視されながら、苛酷な労働を強いられる日々とは、いったいどれほどの苦痛をもたらすものだろうか。あの日、日立鉱山で死ぬのなら死ぬ覚悟で逃げようとした朝鮮人の若者3名は、一体どのような気持ちとともに歩みを進めたのだろうか。一本杉あたりで「日本人」につかまったとき、どれほどの恐怖を感じただろうか。見せしめとして一日中殴られたとき、どんなにつらかっただろうか。かれらはその後どうなったのだろうか。そして、「日本人」は、どのような顔で残虐な行為をおこなったのだろうか。周りの「日本人」は殴られる朝鮮人を一体どのようなまなざしを向けていたのだろうか。私は、目の前の一本杉の風景と証言とを往還するなかで、このようなことに思いを馳せずにはいられなかった。しかし、いくら想像力を働かせたとしても、証言で語られた、あるいは語ることさえはばかられたであろう残虐なありようを頭の中に立ち上げることはできず、そのはかりしれなさを思い知るばかりであった。

4. 私の現実認識の「攪乱」と「更新」、「再編」

当時の私は、帝国日本の暴力について調べるなかで、植民地支配という言葉頻りに目にするようになっていた。そして、恥ずかしいことに、高校時代に授業で見聞きしたときよりもほんの少しばかりその実態に迫っているような気になっていた。それは、資料や証言、遺跡、展示などの目に見える痕跡に触れてきたからでもあった。しかしながら、この場面は、私のなかにある既存の現実認識が揺れ動いた瞬間でもあった。まさに「攪乱」を経験したのである。

私は痕跡の不在と「不在の痕跡」との往還を通じて、一体どれほどの植民地支配をめぐる痕跡が失われてしまったのだろうかということを考えずにはいられなかった。そして、なんの変哲もないようにみえる一本杉がそうであったように、私たちがなにげなくみている風景には、痕跡の有無にかかわらず、しばしば血塗られた歴史が埋め込まれていることを思い起こさせた。このことは動揺とともに私に内省を迫った。私は研究を通じて植民地支配に触れながらも、犠牲を強いられた人びとの痛みにもどれほど目や耳を向けてきたのだろうか。その痛みの理解しえなさについてどれほど真剣に考えてきたのだろうか。高校時代と同じようにしばしば単なる文字として植民地支配を受容してきたのではないだろうか。このような問いが生じたのは、これまでの私が、痕跡と

してあらわれない無数の痛みに対してしばしば無自覚であったためである。

また、一本杉の風景と証言との往還は、私の現実認識に関わって、茨城県と植民地支配をむすびつける機能を果たした。私は全国各地で朝鮮人や中国人の強制連行・強制労働がおこなわれたのを文献を通じて知っていた。にもかかわらず、私にとっての茨城県は、日立市に訪問するまで、祖母が住んでいるところというぼんやりとしたイメージにとどまっていた。他方で、フィールドワークでの経験は、そうした私に対して茨城県を理解する新たな解釈枠組みを形成させた。すなわち、茨城県はどのように帝国日本の植民地支配と関わっていたのだろうか、強制連行・強制労働がおこなわれた炭鉱や軍需工場はどのあたりに位置していたのだろうか、祖母が住む神栖市はどのように関係しているのだろうかという問いとともに、これまでとは異なる茨城県の見え方が浮かび上がってきたのである。加えて、「更新」された茨城県の見え方は、のっぺりとしていた私の強制連行・強制労働をめぐる認識を、より揺さぶりをもたらすものとして「再編」させたのである。

5. 「攪乱」がもたらしたもの

私は植民地主義と向きあう人びとに関心を寄せ、長崎市をフィールドとして調査研究をおこなっている。より具体的には、朝鮮人や中国人の被爆や強制連行・強制労働に関する聞き書きや伝承、遺跡の保存、追悼、補償要求に取り組んできた人びとの生活史の聞き取りを実施してきた。とりわけ、差別にさらされずに済んできた、出自を気にせずに済んできた、声を上げずに済んできたポジショナリティから実践する人びとの自己形成のプロセスに迫ろうとしてきた。

茨城県日立市での経験は、私の主たるフィールドである長崎市の捉え方や調査の方向性に影響を及ぼした。第一に、私が長崎市というフィールドに惹かれた背景について改めて考える契機となった。長崎市では、全国各地の多くの地域と同じように植民地支配や強制連行・強制労働をめぐる聞き書きや伝承、遺跡の保存、追悼、補償要求をおこなう取り組みが組織化されていた。そのため、証言集や遺跡、追悼碑、記録といった痕跡が比較的多く残されている。他方で、とりわけ長崎市において特徴的であったのは、日本の侵略戦争や植民地支配をめぐる「加害の歴史」を伝える資料館が1995年から草の根によって設立・運営されている点である。1990年以降、公立の資料館において「加害の歴史」の展示がしばしば困難になるなかで(山根 2003: 6-7)、とりわけ2000年以降に各地でこうした草の根による資料館が設立されるようになった。そうしたなかで、長崎人権平和資料館³⁾は先駆的な事例のひとつであった。つまり、私はフィールドを選択するにあたって、とりわけ目に見える痕跡の多い地域に焦点化していたのである。証言や追悼碑、資料館などの痕跡は、それらを残すために働きかけた人びとの存在をも示しているのであり、そうした人びとのありようが私の関心の的だったのである。

第二に、残された痕跡に注目して選択した長崎市というフィールドであった

3) 設立時の館名は「岡まさはる記念長崎平和資料館」である。同館は2023年、岡正治(1918-1994)の生前の「性暴力」を公表するとともに、館名変更をおこなった。詳細な経緯については同館のホームページを参照されたい。

ものの、失われた、あるいは現れることがなかった痕跡が数多くあるという事実
に目を向けるようになった。すなわち、残された痕跡が、未知なる全体のう
ちのほんの一部であることを意識し、沈黙のなかに埋もれていった無数の出来事
や人びとの存在に思いを巡らせる試みである。しかしながら、沈黙のなかに埋
もれていった出来事や人びとについて考えることは、様々困難をとまなうもの
でもある。当然ながら街を歩いていてもそのありようは浮かび上がってこな
いうえに、「不在の痕跡」としての史料が誰かから与えられるわけでもない。
その一端を浮かび上がらせるためには、わずかな手がかりから痕跡の不在を問
題化するための「不在の痕跡」を探し出さなければならない。では、どのよう
にしたら「不在の痕跡」の一端に出合うことができるのだろうか。

これに対する解を得るためには、その模索を続けてきた歴史学から学ぶ必要
があるように思われる。さしあたり私の問題関心に即して進められる試みを
考えるならば、以下を挙げることができる。すなわち、痕跡の不在をめぐる語
りに目を向けることである。

4) 筆者は、2022年11月から
2024年8月のあいだの約
70日、長崎市内を中心に調
査を実施した。資料館のボ
ランティアや会員、その家
族を含む12名に対する聞
き取りや参与観察を実施し
たほか、行政文書・新聞記
事・市民活動団体の発行者・
インタビュー協力者の手記
やメモなどの文書資料を収
集した。インタビューは、
一回につき1～3時間程度
おこなった。本稿では協力
者の安全性を考慮して仮名
とした。

5) 晶子さんへのインタビュー
は、2023年7月31日に実
施したものである。

6) 徐正雨は、市民運動団体「長
崎在日朝鮮人の人権を守る
会」の実態調査によって、
1983年に証言を提供し、
インタビュー協力者と深い
親交があった人物である。
徐正雨は14歳で朝鮮から
日本へ強制連行され、端島
(軍艦島)の海底炭鉱におけ
る強制労働を経験した。加
えて、三菱造船所で被爆し、
負傷した身体で廃墟の復旧
作業に従事させられ、解放
後は栄養失調から結核を患
い、入退院を繰り返したの
であった。修学旅行生を前
に講話をおこなうなど様々
な活動に尽力し、暴力と差
別の非人道性を訴え続けた
(長崎県被爆二世教職員の
会ほか2002)。

たとえば、私が生活史⁴⁾を聞き取った晶子さん⁵⁾(80代・仮名)の語った三つの
エピソードは、それぞれ異なる視点から「不在の痕跡」を担っている。一つめに、
現在に残されていない遺跡をめぐる「不在の痕跡」である。晶子さんは遺跡の
保存運動に参加した経験について話し、どのような言説状況のなかで植民地支配
を物語る遺跡の保存が困難になったのかを語った。このエピソードは、現在の
痕跡の不在の生成過程を示すものであった。二つめに、死者をめぐる「不在
の痕跡」である。晶子さんは、長崎市で工事があるたびに現場に赴き、遺骨を
探してまわった経験について語った。そして、あるとき遺骨を見つけて行政に
工事の中断を要請したものの、工事は続行されたという。このように復興とい
う名のもとに原爆の被害に遭った死者の存在が踏みにじらる実態は、晶子さん
の記憶に埋め込まれているにとどまり、しばしば文字媒体としては残りにくい
ものだったのである。三つめに、具体的な生に関する「不在の痕跡」である。
晶子さんは、今は亡き朝鮮人被爆者のひとりである徐正雨⁶⁾さんと交流した経
験について語った。そこからみえてきたのは、徐正雨さんが提供した証言から
は浮かび上がってこない、晶子さんの目線から立ち上がる彼の生の姿である。
つまり、証言それ自体のみならず、その周りを生きていた人びとの語りからも、
ある人物の生のありようをみることができるのである。これらの「不在の痕跡」
は、痕跡の不在のほんの一部を物語っているに過ぎないだろう。それでもなお、
痕跡の不在をめぐる語りは、植民地支配に対する理解しえなさ、その残虐性の
はかりしれなさ、語り継ぐことの難しさを私に突きつけ続ける。

茨城県日立市を訪問して以降、私は主たる研究フィールドである長崎市への
訪問を見送り、全国各地を巡るようになった。より具体的には、北海道、群馬、
茨城、神奈川、東京、長野、京都、滋賀、大阪、兵庫、岡山、広島、山口、愛媛、
福岡、大分に赴いた。なにが私を突き動かしていたのかは分からない。だが、
各地をみてまわる、すなわち身体で感じながら各地と植民地支配をむすびつけ
る作業を抜きにして、私の主たるフィールドである長崎市と対峙することがで

きないように思われたのである。つまり、より多くの「攪乱」を経験する必要があるように感じていたのである。現在も道半ばで、各地を巡る歩みが私の研究にどのような意味をもたらすのかは未知数である。これまでの経験を踏まえて言えることがあるとするならば、まず、より厚みを増して痕跡、ならび痕跡の不在が浮かび上がったきたということである。また、とりわけ「不在の痕跡」の発見は、多くの人びととの偶然を含む出会いによって導かれたことである。そして、各地における様々な人びととの関わり合いを通じて、この現象はどのように理解できるのだろうか、長崎市ではどうだろうかという幾つもの宿題を抱えて帰路につくことになった。

こうした調査の歩みは、ある種の効率性が求められる学術界における傾向(根本 2024: 5-6)とはしばしば相容れない作業であるかもしれない。実際、各地を巡っている間に論文などの成果をあげることはできなかった。ひょっとしたら、各地を巡らずとも長崎市をフィールドに据えつつ、研究を進めることができたのかもしれない。他方で、社会学者の根本雅也は、調査過程における〈出会い〉と〈対話〉の積み重ねが、ときに新しい問いを生成させながら「質的調査に命を吹き込む重要な要素」であるという(根本 2025: 54)⁷⁾。ここでいう〈出会い〉とは、具体的にはインタビュー・調査対象者との出会いを指し、衝撃をとまなうものである。〈対話〉は、そうした対象者との〈出会い〉を、悩みながらも、なんとか理解しようとするプロセスである(根本 2025: 33)。より具体的には、〈対話〉とは、「調査対象への直接のインタビューだけではなく、その語り・データとの対話、語りやデータをもとに自身の考え方や立場を問い直す対話、自身の調査を記述し伝えるという読者との対話を含んでいる」(根本 2025: 33)。私は今、本稿の執筆を契機として各地で出会った人びとの語りや風景との〈対話〉を始めたばかりである。もし質的調査における偶然の〈出会い〉とその理解を試みる調査者の〈対話〉が、「調査を展開する動力源」となり、「調査者の視点と思考を拓く契機となる」(根本 2025: 33)のだとするならば、各地を巡った日々が、長崎市で調査研究を深めるための礎となると信じたい。

7) 念校の時点での頁であるため、出版時の頁と異なる可能性がある。

6. おわりに

この文章を執筆しているのは、とりわけ排外主義と歴史修正主義の広がりとともに差別と分断の煽りが目立った2025年7月の参議院選挙の最中である。本稿では、痕跡の不在と「不在の痕跡」に着目してきたものの、痕跡がしばしば無きものとして扱われる、あるいは否定にさらされる日本社会のありようにも心をとめたい。

付記

本稿の執筆にあたり、フィールドワークの機会を与えてくださった市民運動団体「モア」の方々、現地でご案内くださったの方々、インタビューに協力してく

ださった方々、長崎市での滞在を支援してくださった方々に心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 牧田義也, 2019, 「歴史・記録・記憶——歴史実践と路上のアクチュアリティ」『史苑』79: 148-163.
- モンダンヨンピル, 2025, モンダンヨンピルホームページ (2025年7月20日取得, http://www.mongdang.org/jp/bbs/content.php?co_id=page01)
- 長崎県被爆二世教職員の会・長崎在日朝鮮人の人権を守る会・岡まさはる記念長崎平和資料館, 2002, 『追悼 徐正雨さん——その誇り高き人生』.
- 根本雅也, 2024, 「理想と現実のはざままで思い切りあがくために——『面白くて刺激的な論文のため のリサーチ・クエスチョンの作り方と育て方』から考える」(書評)
- , 2025, 「調査が動き出す」有末賢・小倉康嗣・松尾浩一郎編『社会学的質的調査の挑戦——〈出会い〉と〈対話〉の社会調査論』図書出版みぎわ (近刊), 31-57 (予定).
- NPO 法人長崎人権平和資料館, 2025, NPO 法人長崎人権平和資料館ホームページ (2024年7月20日取得, <https://www.nagasakiinkenheiwa.com/>).
- 歴史変纂委員会編, 2023, 『茨城における在日朝鮮人の歩み 改訂版』歴史変纂委員会.
- 山根和代, 2003, 「平和博物館、平和博物館建設運動の現状と課題」『立命館平和研究』4: 3-14.

〈越境〉の可能性を探求する

——フィールドを超えて訪れた「カダヤワン祭り」の事例から

鈴木 佳苗 一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程

1) フィリピンにおけるムスリム社会の中心はミンダナオ島であるが、1972年のマルコス大統領が布告した戒厳令以降、戦火を逃れるため国内の他の地域へ移り住むムスリムが激増した。マニラ首都圏に形成された複数のムスリム・コミュニティは、ミンダナオ島やスル諸島を離れたムスリムの受け皿となった(宮本 1994)。このような歴史的経緯をふまえ、筆者はマニラ首都圏のムスリム・コミュニティを調査地としている。

2) ミンダナオ島は人口の2割がムスリムであり、その他の少数民族も含めて多様な民族が集住する地域である。

3) ルマド族はミンダナオ島の先住民族で、イスラーム教とキリスト教には属さない民族である。

4) スペイン植民地支配期、スペイン人はスペイン人に服従せず、スペイン・カトリック文化の影響を受け入れなかった南部のイスラーム化した住民を「モロ(Moro)」と呼んだ。これは差別的な呼称であったが、のちのイスラーム分離独立運動において、フィリピン人に対抗する民族的アイデンティティを示す言葉として、自ら「モロ民族」という言葉を採用した(川島 2012)。

5) マラナオ族はミンダナオ島中西部の南ラナオ州にあるラナオ湖周辺をルーツとするイスラーム教の言語民族集団である(宮本 1994)。

6) タウスグ族は主にミンダナオ島西端のサンボアンガからスル諸島周辺にルーツをもつイスラーム教の言語民族集団である(宮本 1994)。

7) ソンコックとは、東南アジア地域においてムスリム男性が着用する帽子のこと。

はじめに

本稿は、「先端課題研究」第2回、第3回の報告でキーワードのひとつとなった「越境」に主眼をおき、〈面白い〉研究の構成要素として「越境」がいかにして立ちあらわれるかを探求するものである。具体的には〈越境〉を、①調査地を越境する、②調査地に立ちもどる、③学術領域を越境する、という3つの局面に分類し、これらがいかに〈面白い〉研究とかかわるかを考察する。

1. 調査地を越境する

筆者はキリスト教徒が9割を占めるフィリピンにおいて、マイノリティであるムスリム社会について調査・研究をおこなっている。主たるフィールドはフィリピンの首都マニラであり¹⁾、マニラ首都圏に居住するムスリムに聞き取り調査をおこなってきた。

先日、東京都港区でミンダナオ島²⁾発祥のカダヤワン祭りが開催されるということで、筆者がこれまで対象としてきたフィールドを超え、足を運んだ。カダヤワン祭りとは、ルマド族³⁾とモロ民族⁴⁾を中心とする人々が、彼らの民族衣装を身にまとい民族舞踊をおどる、毎年ダバオで開催される祭りである。文化継承における観光業の役割について研究した Raymart Felicilda と Aivie E. Dacay Reyes によれば、カダヤワン祭りは生命への感謝や先住民族文化を祝す祭典として、フィリピンにおける祭りのなかでも注目されている(Felicilda and Reyes 2025)。

東京で開催されたカダヤワン祭りでは、フィリピン人もしくはフィリピンにルーツをもつ日本人参加者が、マラナオ族⁵⁾やタウスグ族⁶⁾といったムスリム・グループの民族衣装で登場し、それぞれの伝統舞踊を披露した(図1)。さらに、ダンスコンテストに出場した者は、それぞれの民族文化の魅力についてスピーチをおこなった。ステージに立たない参加者たちに目を向けてみると、ソンコック⁷⁾を着用する男性や、さまざまな民族衣装で着飾った女性で賑わっており、会場にはそれぞれのムスリム・グループの特徴や装飾について説明されたパネルが設置されていた(図2)。



図1 マラナオ族の伝統舞踊を披露する女性
(2025. 7. 19. 筆者撮影)



図2 イラヌン族を紹介するパネル
(2025. 7. 19. 筆者撮影)

祭りの主催者に話を聞いて驚いたのは、当日の参加者のほとんどがキリスト教徒であり、フィリピン人ムスリムは審査員をつとめた1名のみであったという事実である。ムスリム・グループそれぞれの舞を披露し、民族文化の魅力を述べた彼女たちもまた、ダバオやマニラ首都圏出身のキリスト教徒であるという。主催者によれば、本イベントの目的は、フィリピンの多様で豊かな文化を祝福するとともに、ムスリム・グループのもつ文化へ敬意と感謝を示すことにあるという。

これまでのフィリピン研究における先行研究で述べられてきたように、フィリピンでは政府レベルから市民レベルまで、キリスト教徒社会とムスリム社会のあいだでは長らく対立が続いてきた。フィリピン南部では1970年代にイスラーム分離独立運動が展開されてからというもの、紛争が断続的に繰り返された。フィリピン・ムスリム研究者である川島緑は、2005年にフィリピン人間開発ネットワークがおこなった全国規模の意識調査で「ムスリムはおそらくテ

ロリスト、または過激派である」と回答した人が47%にのぼったことなどを指摘したうえで、フィリピン人ムスリムの多くが就職や住宅の賃貸など、日常のさまざまな場面で差別されていると感じていると述べている(川島2012)。

近年では融和に向かっているという見方がある一方で、筆者がこれまでマニラ首都圏で調査してきたキリスト教徒のコミュニティでは「ムスリムは怖い、テロとかかわりがあるため良いイメージがない」といった声は未だにある。ムスリム・コミュニティにおけるムスリムへの聞き取りにおいても「わたしたち(ムスリム)は恐れられている、差別を感じることもある」との語りがしばしばある。そのようななかで、今回筆者が調査地を超えて参加したカダヤワン祭りは、ほぼ参加者全員がキリスト教徒にもかかわらず、ムスリム文化を共有し、たのしみ、讃えていたという点で、従来の理解を覆す経験となった。

2. 調査地に立ちもどる

筆者が調査地を越境したことで得られたものは、佐藤圭一による報告「世界 Large-N 症候群——『面白い研究』と調査対象の『手触り』」(2025)において言及された「手触り」に近いと考える。佐藤は報告において、「手触り」の喪失こそが、量的研究から〈面白さ〉につながる洞察やひらめきが生みされない理由であること、また、研究者みずから調査をおこない、データ収集のプロセスに直接関わる重要性を指摘した。つまり、「手触り」は論文からこぼれ落ちるかもしれないが、収集したデータの背景にあるコンテクストを知ることが、〈面白い〉研究の鍵になるのではないかという主張である。

筆者が主たる調査地から離れた土地で見聞きした経験は、直接的にデータとして論文に記述することはないだろう。しかしながら、そこで得た「手触り」は、筆者がこれまで検討していた論文の問いや方向性、すなわち規格自体を問いなおすきっかけとなった。「ムスリムは怖い」といった声も根強くある一方で、カダヤワン祭りはムスリムの民族文化を色濃く反映しつつも、キリスト教徒によって企画され運営されたイベントであった。そして、キリスト教徒が彼らの文化を理解するために、会場のパネルや踊りの衣装を準備したという紛れもない事実は、自身の調査地からは見えてこなかったキリスト教徒とムスリムの関係性を映し出すものである。ここでの「手触り」によって、今後、自身のフィールドにおける調査においても聞き取りの内容や方法を再検討することとなった。調査地を越境することは、研究を遂行するうえでは遠回りのように感じるが、〈面白い〉研究につながりうる気づきを与えてくれる。

3. 学術領域を越境する

本研究会では、学術分野からの越境、または学術領域からの越境についても、複数の報告者から〈面白い〉研究の構成要素として投げかけられた。

太田美幸の報告「人間形成と社会形成のノンスケラブルな関係——教育社

会学をはみでる〈教育と社会〉研究」(2025)では、教育社会学という分野が直面する構造的な課題に対して問題提起がなされた。特に強調されたのは、教育社会学が「職業社会において高い成果を上げるために必要な能力」と「よりよく生きるための力」をしばしば同一視し、学力形成をあたかも良い人生の前提として位置づけているという指摘である。教育社会学という学問分野は、本来であれば、そのような学力中心主義に対して批判的なまなざしをもち、学力をはじめとする評価軸がもつ意味や、その妥当性に問いを投げかける役割を担うべきはずである。ところが、実際に学力の格差や教育機会の不平等といった問題を量的に可視化し、それを是正することを目的とした研究が主流となっている。太田はそうした研究のあり方に疑問を抱き、自身の問題意識に通ずる学術分野を越境しながら、調査・研究をおこなっている。学術分野をはみでて自身の研究テーマと向き合うことで、従来の教育社会学を乗り越える挑戦をしている。

小泉佑介の報告「地図の〈面白さ〉——地図を読む、地図を描く、地図とともに歩く」(2025)においては、学術領域、すなわちアカデミアをも越え、多様なバックグラウンドをもつ人びととの共同作業によって生み出される〈面白い〉研究の手がかりが紹介された。地理学者であり、地図を研究の柱としている小泉は、デザイナーとの協業をつうじて互いのアイデアを交流させ、自身のみでは発想されなかった新たな地図のデザインが誕生した。領域を越えて協力関係を築くのは、共通言語を共有していないなど、しばしばプロジェクト遂行には困難をとまうこともあるが、学術領域からの越境が、最終的には学術領域へ還元できる成果を生むことを示している。

さらに、牧田義也の報告「Nonscalability と歴史実践——アート・地域・歴史学の交差」(2025)においても、論文では記述できないものや、こぼれ落ちるものを表現する術として学術領域からの越境が提示された。牧田は一つの方法として、アートがもつ可能性を強調する。歴史学者である牧田は、論文からは捨象されてしまう歴史実践を指摘したうえで、そのこぼれ落ちてしまうもののなかにある〈面白さ〉に注目する。そのため牧田は、自身の研究とは少し離れた分野での活動として、歴史実践としての芸術実践をおこなうプロジェクトに参加している。たとえばフィリピンでは、忘却してはならないマニラ戦や性暴力の歴史を、現存する事件発生現場の部屋で作品制作をおこない、アートとして成果を残した。学術研究のものさしだけでなく、自身が持ちあわせていないさまざまな基準とも向き合いながら歴史を捉え、研究に立ちかえる営みが、〈面白い〉研究の出発点になるのではないかと述べている。

おわりに

本稿では、「先端課題研究」第2回、第3回の報告でたびたび言及された「越境」に着目し、〈面白い〉研究のエッセンスとして、越境がいかに立ちあらわれるのか、筆者が調査地を越境した経験や、学術分野あるいは学術領域における報告者による越境の経験から探ってきた。これらに共通するのは、従来の知見

では理解しがたい事象との遭遇や、異分野の人びととの協業でしばしば困難をともなうなど、越境は〈遠回りな〉作業であった。しかしながら、この〈遠回りな〉過程を辿ってゆくことで新たな発見や洞察を獲得することができ、最終的には学術的研究へ還元できる成果を生む可能性があると言えるだろう。

筆者は現在、民間企業に勤めながら大学院生として研究をおこなっているが、越境は自身のライフワークとしても捉えられるのではないかと考えている。研究会では、異なる領域の人びとが協力する際の課題として共通言語の不在が挙げられたが、翻訳者のような立場を担うことができないだろうか。筆者自身の研究への還元はもちろんであるが、越境がもたらす学術的研究の社会的意義についても、いま一度模索したい。

参考文献

- 川島緑, 2012, 『マイノリティと国民国家——フィリピンのムスリム』山川出版社。
- 佐藤圭一, 2025, 「市民の価値観の生態学的アプローチ——実験的アプローチの「狭さ」を越えて」松尾隆佑・源島穰・大和田悠太・井上睦編『インフォーマルな政治の探究——政治学はどのような政治を語りうるか』吉田書店, 289-315。
- 鈴木佳苗, 2025, 「境界をつなぐ食——現代マニラ首都圏に暮らす回帰ムスリムの語りから」修士論文, 一橋大学大学院社会学研究科。
- 宮本勝, 1994, 「ルソン島に渡ったムスリム——フィリピン」板垣雄三監, 片倉もとこ編『講座イスラーム世界1——イスラーム教徒の社会と生活』悠思社, 117-152。
- Felicilda, Raymart. and Aivie E, Dacay Reyes, 2025, “Kadayawan Beyond the Streets: Understanding Tourist Motivations and Experiences in Festival Tourism in Davao City,” *International Journal of Research and Innovation in Applied Science*, X(VI): 607-612.

編集後記

「いったい、誰に向かって、何を伝えようとしているのか」。第3回研究会の課題として提出されたレポートに対して、編集委員の一人である赤嶺淳から飛び出した言葉です。前号の原稿の修正と時期を重複しての執筆であり、大学院生としてはこれほどのペースで執筆することは珍しいかもしれません。そのような状況もあり、編者に届いた原稿の多くは「学生のレポート」でした。つまり、教員に向けて、義務として求められ書いた文章でした。赤嶺の言葉は、そうした意識を問うものだったと思います。書いたものを世に届けることは、誰かに、何かを伝える、ということです。伝えたい「何か」がなければならないということでもあるでしょう。本特集の論考においても、まだそうした「何か」が明確になっているわけではありません。しかし、「何か」を生み出そうと格闘する、若い研究者の様子を垣間見ることができます。誰に何を伝えるのか。伝えるためにはどのようにしたら良いのか。私自身も未熟ですが、それらを念頭に、調査し、考え、書いていきたいと思います。

2025年10月

『きわ』編集委員会 根本雅也